

事例 15 : 部屋での監視

対象者の状況

⇒ 75歳、男性 要介護度2、寝たきり度A、認知症高齢者の日常生活自立度

身体拘束の状況

昼夜の徘徊が激しく、夜間の不眠が見られたり、無断で外出して自宅に帰ってしまうこともあった。歩行に危険はなかったため、ベッド柵等を使用することはなく、自由に動けるようにはしていたが、徘徊の防止のため、詰所の前の部屋に入ってもらい観察を密にしていた。しかし、本人はそれを嫌がっている様子であった。

対応方法の検討

本人が部屋から出ようとする時職員が声をかけたり、外へ出るのを止めたりしていたが、そのときは嫌がったり、機嫌が悪くなったりしていた。

身体上は比較的元気な方なので、無理に自室に押し込めず、昼間に適度な疲労感を感じてもらうことが、夜間の良眠にもつながるのではないかと考えた。

対 応

徘徊をしようとする時に「どこへ行くの」と声をかけると「仕事に行く」と口癖のように言われた。このため、御本人に何らかの役割を持っていただくことを考え、軽作業への参加、たとえば喫茶の手伝いやおしぼり作り、車椅子利用者の食堂への移動の手伝い等をするのをケアプランの中に位置づけ実践した。

経 過

作業に参加してもらおうようになって1週間ほどで、夜間はよく眠れるようになった。

徐々に徘徊や無断外出がなくなり、夜間も良眠ができ、状態が落ち着いてきたため、1ヶ月ほど後には、詰所の前の部屋から別の部屋に移ることになった。

なお、別室に移る際には、本人が混乱されないよう、ベッドの位置や向きなど、室内を前の部屋と同じ状態にして移っていただいた。

【着眼点（ポイント）】

利用者本人に何らかの役割を持ってもらうことは、QOLを高めることにも有効だという事例

徘徊しながら「仕事に行く」と言われていることから、本人の生活史を参考に、その人にあった役割や出番を見つけ昼間の生活に充実感を持たせたことが、良い結果につながったもの。

